

本書第三章一節で述べられているように、日本人の歴史観は、一面で武威・神国観念・日本型華夷・皇統、つまりナショナリズムにつながると同時に、一面で中国の歴史にも通じており、日本・中国・印度の多元的な世界観（ここでは日本は相対化される）とが併存していた。近世人の歴史観において、ナショナリズムと多元的な世界観は、どのように関連し、どのような構造にあったのであろうか。

また、本書では、『寛永諸家系図伝』といった大名家の家譜編纂によって撃発された歴史意識と軍書の関連が明らかにされているが、近世中後期以降、各大家家では、藩祖や中興の祖を明君とした「明君録」が作為される。「明君録」は、虚実が混ざった歴史性・物語性を持ち、仁政と武威を強調する。その性格は、軍書の世界に通じているように思われるが、どうであろうか。本書によって刺激され、妄想はやむことがない……。

「あとがき」によれば、本書が刊行されるまで、十数年の歳月が流れている。本書はその歳月に見合う規模と興行きを備えている。軍書は、通俗性があるにもかかわらず、ではなく、通俗性を持つがゆえに、社会に与えた影響は大きい。その影響は、近世にとどまらず、近現代に及ぶのではないか。本書は、日本人の歴史観と歴史意識を解明する手がかりを示しているようにおもわれる。今後、この地図を手に、軍書の森に分け入る歴史研究者が増えることを期待したい。

（中京大学教授）

高野秀晴著

『教化に臨む近世学問——石門心学の立場』

（ペリカン社・二〇一五年）

相原 耕作

—
著者は既に石門心学に関する論考をいくつも手がけている。但し、本書はそれとは独立の一大論文であり、博士論文「一八世紀日本における民衆教化の展開と学問への視線——石門心学を中心に」（京都大学大学院教育学研究科）に大幅に加筆・修正を施したものである。

著者の研究の特徴は、自明の前提を疑うことである。例えば、石門心学の「創始者」は石田梅岩なのか。著者は、手島堵庵が梅岩の教えを「創始者」の教えとして語ることによって石門心学を創出したという（手島堵庵による石門心学の創出『日本思想史学』三五、二〇〇三年）。石門心学は幕末には門人組織内の統制力が弱くなり衰退したという通説に対しては、統制力が及ばないほど門人組織外で石門心学が普及した可能性を指摘する（石門心学における教化統制力とその圏外——石川謙『石門心学史の研究』の再検討『季刊日本思想史』六五、二〇〇四年）。口頭で

平易に説き聞かせる石門心学の「語り」に注目する研究動向に對しては、口頭の「語り」が「聞書」されて書物として普及した面にも目を向ける。「卑俗」で「卑近」な「語り」が「平易」とは限らない。それが「聞書本」を要請し、新たな展開が生まれるという（「教化メディアとしての心学道話聞書本」「日本の教育史学」四六、二〇〇三年、「心学教化の声と文字」「民衆史研究」八六、二〇一三年）。まさに目から鱗が落ちる思いである。

本書はどうか。「教化」には「上から下に向かって教え導く」イメージがあるが、そこに「下から上へ」という逆方向の視線を持ち込む。教化される側の「民衆」の「学問への視線」が「教化」する側に影響を与えると想定するのである。研究・教育に携わる読者は、他人事でない切実なものとして、近世学問の格闘ぶりを追体験することになる。

二

本書は、序章・第一部・第二部・結章の四つの部分からなる。第一部（第一章～第四章）は、石門心学について考察する前提として、石門心学以外の「学問」が「教化」に臨む様相を描き出す。第二部（第五章～第十章）では、石田梅岩と石門心学の動向が検討される。

序章「教化に臨む学問」では、江戸時代に「学問」が民衆に對する「教化」の場でどのように説かれたのかを考察するという、本書の問題設定が説明される。「集団内の次世代の育成」

である「教育」と異なり、「集団間の秩序的な関係づけ」である「教化」は（一〇頁）、教えの説き手と受け手は同じ集団内にいるという前提に依拠できない。説き手は受け手の期待や警戒感にさらされ、教化を受けつけない「非・受け手」すら存在するから、教化の「困難性」に目を向けるべきである。それを、受け手の反応ではなく説き手の「語り」のなかに探る。語る時点で説き手は受け手の視線の影響を受けているからである。その点、大勢の聴衆を集めて学問による教化を行う石門心学は、格好の考察対象である。また、「特定の演者が不特定多数の群衆にむかつて語りかける口頭の情報伝達型式」である「マス・ローグ」として石門心学を扱う立場があるが（二三頁）、これとは異なる見通しが提示される。

第一章は「学問誘導の語り——貝原益軒『大和俗訓』の場合」である。書物を通じて広く民衆に向けて語る貝原益軒の学問は、教化対象を限定するものではないが、「世俗」の「小人」が析出されてしまう。第二章「渡世」に資する学問——『河内屋可正旧記』の場合——は、「益軒本の読者」層に属する河内屋可正が地域の後継者の教化に臨む場面を検討する。可正は、教化に對する「諦観」から「御公儀様」に過剰に期待する一方、「隠居」して「世俗」と半歩離れた学問を構想するが、「世俗」から浮いてしまう。第三章は「職分に応じた学問——その困難性」である。身分に応じた学問の必要性を説く「職分論」は、社会的に有用な職分を有しない者を疎外する可能性があること

に注意しながら、「庶民の学問」を説く常盤潭北『民家分量記』、「町人の学問」を説く西川如見『町人袋』、「商家の亭主」を対象とする上河宗義『商人夜話草』を検討する。第四章「動揺する教化——談義本を手がかりに」は、教訓を滑稽化したり茶化したりする談義本を取りあげる。談義本では、教化は予定調和的に進行せず、動揺する。

第五章「赤裸」になる覚悟」は、『齊家論』を手がかりに石田梅岩の特異性を描き出す。梅岩は、「庶民の学問」や「町人の学問」ではなく「学問」を説いた。「儉約」を説く通俗的な道徳論に見えるが、「聖賢の道」に基づく梅岩は妥協なく教えを説き、教えの実践には「覚悟」を要した。「心」を知るという自らの開悟体験に基づく梅岩の教えは、開悟体験を共有しようとし、しない者には届かない可能性がある。第六章「教化に臨まんとする「病」」では、言句で伝えられない「心」を言句によって伝えようとする梅岩の熱意が語られる。孟子の教えに立脚して、「大病人」を救うには「言葉」を手がかりとせざるを得ないと考えた梅岩は、自らも「大病人」であることを自覚し、「一身ヲ棄テ」て「聖人ヲヒキ受ル」ことを選び、風に応じて音を発する「鳴子」に自らをなぞらえようとした。

第七章「教化による継承」は、梅岩没後の学問の継承の仕方を探る。「不器量のもの」として師と自身の懸隔を痛感した手島堵庵は、教化活動を通じて、梅岩の教えを実践するために切磋琢磨する学友を獲得しようとする。第八章「同輩」への教

化と教育」によれば、「儒者」を自称した梅岩と異なり、堵庵は自らを梅岩の教えの「取次」と位置づけ、梅岩の教えを平易に説き聞かせる「気楽」な講釈を行った。これは、教化対象を「同輩」である「町家」の者に限定することにもなったが、数百人の聴講者を集める心学道話が形成された。堵庵は「本心」を知ることを選いたが、一般向けの教化と門人向けの教育を区別した。こうして、「梅岩の学問」として枠付けされた石門心学が手島堵庵によって創出された。第九章は「石門心学への批判」である。教義の内容や教化の仕方に仏教の影響を見出す批判が多く、心学は「学問」とは言えないという批判もあった。学問でなくとも教化としては有益だという評価もあったが、教化の効力を疑問視する批判もあった。第十章「頑民」への教化——脇坂義堂『心学教諭録』の場合」は、人足寄場における脇坂義堂の道話を検討する。義堂は、教化の困難な「頑民」に対し、「性」や「本心」を知ることが説かず、「御上」の「御慈悲」に身を委ねることで「元の良民」に帰らせようとした。

結章「躋」のゆくえ」では、「五体」に「和合」をもたらし「躋」と「屁」の比喩を手掛かりに、全体の考察がまとめられる。手島堵庵が「無用の用」を体現する「躋」の立場に立つのに対し、脇坂義堂は「屁」の比喩を用いるが、学問の意義はどうなるのか。堵庵と義堂は教化の及ばない者に届く言葉を創り出すには至らなかった。心学道話は「マス・ローグ」の「脱共同体的」な機能を十分に開花させたとはいえないが、教化の場で

民衆の視線にさらされる学問が迎える危機は、新しい学問を起動させる可能性でもある。

三

上から下に一方的に行われるかに見える「教化」の場においてこそ、「学問」が「民衆」の視線にさらされ、その意味が問われる。それを「民衆」の反応ではなく、「学問」の語り方の分析を通じて探る。二重の視点の転換に基づく近世学問の分析は、新鮮で説得力がある。但し、本書で使われているいくつかの重要概念については疑問がある。

まず、「学問」と「民衆」という概念が曖昧である。「民衆」は「教えの説き手が構成した産物」（一八頁）とされているが、説き手の「構成」の前提となる「民衆」の存在を筆者は想定しているように見える。それは誰なのか。為政者と学者以外の人々が「民衆」なのかもしれないが、近世日本の学者は為政者の予備軍ではなく、「アカデミズム」に立てこもる特権階級でもない。本書に登場する学者の多くは「民衆」出身に見えるが、「学問」をすると「民衆」でなくなるのだろうか。では、「学問」とは何か。著者は、教化の受け手が学問を「学問」として受け取るとは限らないため、「教化の局面において生起してくるもの」（一九頁）として「学問」を捉えることを提唱するが、これでは「民衆」への「教化」を行わない学問は「学問」でなくなる可能性がある。実際、本書はそうした学問に目を向けな

いが、例えば、「卑近」な教えを大切にした伊藤仁斎、「小人」
「民」に対する「礼」による教化の有効性を主張した荻生徂徠、古典日本語によって明晰な言語表現を实践した本居宣長の「語り口」と比較することによって、石門心学の「語り口」の特徴をより立体的に明らかにできるのではないだろうか。

次に、「教化」という概念である。「集団内の次世代の育成」と「集団間の秩序的な関係づけ」という「教育」と「教化」の区別は、高橋陽一「共通教化の基礎仮説——近代日本の国民統合の解明のために」（東京大学大学院教育学研究科教育学研究室「研究室紀要」二二、一九九六年）に依拠しているが、ここから著者は、一定の「集団内」にともにいるという前提に依拠できない「教化」の場合には、「受け手が説き手の教えを学びとろうとする意志をあらかじめ有していることや、説き手と受け手がある共通した志を有しているようなことは期待できない」（二〇頁）という独自の見解を導き出し、この点で近世学問が置かれた状況は、近代の学校の「教育」とは異なるという。しかし、勉強嫌いの子どもや勉強は役に立たないと信じる親の子どもにも教育を受けさせる近代の学校では、近世学問より深刻な事態が発生することもあるのではないだろうか。

「集団内」と「集団間」の違いしか見ないため、著者の分析は説得力を欠くところがある。石門が「無縁」の人に教えを説くのは「集団間」の「教化」、石門の門人同士で行われるのは「集団内」の「教育」とするのも同様である。著者は、「次

世代の育成」と「秩序的な関係づけ」の違いを無視するが、五倫や職分に従い、「御上」のもたらす「太平」に感謝しながら生きるという点で、石門の教えは「教化」の要素を含むであろう。それでも石門集団内で行われるなら「教育」なのだろうか。「集団」の範囲の設定の仕方では話が変わるようだが、だとすれば、もう少し丁寧に議論を切り分けるべきであろう。

「マス・ローグ」にも問題がある。著者は、後藤宏行『「語り口」の文化史』（晃洋書房、一九八九年）に依拠して、心学教化の語りは、マス・ローグの「受け手と送り手の相克、葛藤、対立をバネにして」、「受け手集団のなかの、メンバー相互の連帯をも断ち切り、分断し、解体していく機能」を十分に開花させたと言いつつ、「脱共同的」な機能は心学教化の主要な機能ではなかったと結論づける（四〇五頁）。しかし、「集団間の秩序的な関係づけ」としての「教化」がこうした機能を果たさないことは検討を要しない。

むしろ注目すべきは、マス・ローグの受け手が伝達される情報を主体的に再構成するように触発すべく、説き手が「語り」を工夫するという後藤氏の議論である。この点を、説き手の「語り」に受け手の影響を見出そうとする著者の方法と関連づければ、石門心学のマス・ローグとしての可能性をより積極的に示すことができるのではないか。

「政治」も気になる概念である。本書には、「教化」の境界の自覚が「政治」への期待となって現れる興味深い場面がしばしば

登場するが、著者はこのことに否定的であるように見える。しかし、万人に届く万能的「教化」はなく、「教化」の担い手を「学問」に限る必要もない。近世が長い殺し合いの後の時代であることを思えば、「天下泰平」をもたらす「政治」に近世の「学問」が期待するのは、「教化」の及ばないところを「政治」に委ねてしまふ無責任な態度とは言えまい。人が環境から影響を受ける以上、「太平の御世」は「教化」の機能を果たすのである。犯罪が蔓延る乱れた世の中に必要なのは、道徳的な「教化」ではなく秩序を回復する「政治」の機能であって、それを前提にしてこそ、「学問」による「教化」も有効に機能するのではないだろうか。

「学問」による「教化」には限界がある。本書の登場人物がそのことをよく弁え、しかも、自身の不完全さに悩む姿に、評者は共感を覚えた。特に興味深いのは、談義本に描き出される「動揺する教化」である（著者の「談義本に見る宝暦期江戸民衆教化の一端——静観房好阿「当世下手談義」「教訓統下手談義」を手がかりに『日本教育史研究』二七、二〇〇八年も参照）。「うどの大木」のような人物や当てずっぽうで「売卜」をする者の教えが、聖人君子の教えよりも人々に受け入れられるのはありそうなことだし（二二三—二五頁）、「よくないことをよくない」と指摘する「野暮な教化」よりも、「よくないことをさらに煽り立てるようなやり方」が「教化」として有効な場合もありうるだろう（二四一頁）。「学問」による「教化」を受け付けなかった者

が、世の中で痛い目にあう「誠」の「修行」によって改心に及ぶ話は（三三四頁）、「教化」の機能を果たすのは「学問」だけではないことを示している。「動揺する教化」から、多様な「教化」の可能性を読み取ることができるのではないか。

「開かれた文体」を求め、「対象に絡みついて容易に離れない納豆のような文体」を書きたいと思いつつ、そのような考え方を自省してしまう著者の誠実な姿が（あとがき）、民衆の視線にさらされつつ誠実に思い悩む近世学問の姿と重なり合い、感銘を受けた。教育に携わる現代の研究者が本書に「教化」されるところ大であることは間違いない。

（明治大学専任講師）

中野目徹著

『明治の青年とナショナリズム』

——政教社・日本新聞社の群像——

（吉川弘文館・二〇一四年）

鈴木啓孝著

『原敬と陸羯南』

——明治青年の思想形成とナショナリズム——

（東北大学出版会・二〇一五年）

岡本佳子

—

昨年从今年にかけて、表題にある政教社、日本新聞社の知識人たちが扱った二冊の本が出版された。早速、それぞれの本について手短な内容紹介と拙評を述べたい。

まず、中野目徹著『明治の青年とナショナリズム』は、二〇〇二年～一三年に書かれた政教社と日本新聞社の知識人たちに関する論文を、同著『政教社の研究』（一九九三年）の続篇としてまとめたものである。『政教社の研究』の目的が「健康なナショナリズム」の担い手であるという通説的な理解を一旦留保して、一つの「集団の思想史」を構築すること（二頁）であ